

ともしび
灯を持つ乙女——山本 芳翠



「灯を持つ乙女」

芳翠は、明治十一年（一八七八年）、フランス国立美術学校に留学し、九年間油絵を学びました。

上の絵は、「洋画の父」といわれる山本芳翠の代表作です。ろうそくのあわい光の中にかび出る、まなざしのやさしい明治の乙女

のすがたが、見る人の心をゆさぶります。この絵は現在、彼が生まれた明智町の山本家にあり、日本美術史に残る名画の一つであるといわれています。

まだ、明けきらぬ冬の朝、旅すがたに身を固めた為蔵少年（芳翠の本名、当時十五才）は、村ざかいの滝坂峠に立ちました。

「おとう、おかあ、しばらくの親不孝をお許しください、おれはどうしても、絵の勉強がしたいのです。」

まだ、家で何も知らずにねむっているであろう父母に向かって、しばらく手を合わせたのち、彼は足ばやに村を出て行きました。

「日本一の絵かきになるんだ。」と、ちかった彼は、京都で日本画の修行にはげんでいましたが、明治四年（一八七一年）、本格的に絵を学ぶため、中国へわたろうとして、横浜港へ行きました。町を歩いていた彼は、とある店先で、今まで見たことのないふしぎな絵に出会って、思わず足をとめました。聞けば、西洋から来たものであるとのことでした。

「これが西洋の絵か。油に絵の具をとかしてかくというが……。うーん、

力強くて生命を感じる絵だ。」

彼は、何時間もその絵の前に立ちつくしていました。その夜、宿へ帰っても、その絵が目の前にちらついてねむれませんでした。次の日もその次の日も、その絵を見に行きました。

「絵は、ただのかざり物ではない。作者の命の表れたものだ。あの西洋の絵には、それがある。あんな絵をかきたいものだ。よし、油絵をやろう。最初から勉強のやり直しだ。」

こう決心すると、為蔵は中国行きをやめ、横浜の洋画家、五姓田芳柳ごせだほうりゅうに弟子入りを願いました。しかし、五度もことわられました。

「おいつ、為蔵ためぞうとやら、それほどまでに言うのなら、これから半年、あの上州屋じょうしゅうやで丁稚奉公ていぢほうこうをしてから出直してこい。」

六度目に願い出たとき、根負けした芳柳ほうりゅうは為蔵ためぞうにそう言いました。

上州屋じょうしゅうやとは近くの表具屋ぐぐやで、親方は、人使いのあらいことで有名でした。上州屋の丁稚ていぢとなった為蔵ためぞうは、朝、暗いうちから、掃除そうじ、洗たく、使い走りあいでし、兄弟子の世話にと身を粉にして働きました。しかし、絵の修行しゆぎょうは、かた時も忘れませんでした。毎夜、人のね静まったころ、ろうそくの灯の下で絵筆を走らせました。仲間のね顔を何十枚もかきました。昼間、使いに出たときに見た、港の景色けしきを思い出してかきました。紙さえ十分に手に入らなかったので、菓子や反物たんものの包み紙を人に分けてもらって画帳としました。

修行しゆぎょうはつらいものと覚悟かくごしていましたが、それでも、時としては暗い思いが暗雲のように胸の内いっぱいに広がってくるのを、どうすることもできないことがありました。

「わたしは、こんな所で何をしているのだろう、何とかして、絵かきになりたい。はたして、入門を許してもらえるものだろうか。」

そう思いながらも、目にうかぶのは、あの店先で出会った油絵です。

「あの絵に、自分のたましいがすいこまれていくようだった。あの絵に、学ば

なければならぬものが、いっぱいある。」

と思い、為蔵ためぞうは夜の明けるのを待ちかねたようにして、また、その絵を見に行くのでした。

こうして、半年が過ぎて行きました。為蔵ためぞうは、

思いきって、自作の絵一枚と入門願あらいわいを持って、再び、五姓ごせい田芳柳ほうりゅうの前にすがたを現あらわしました。

「うーむ。お前まへというやつは……。」

芳柳ほうりゅうは、その絵を見てひそかに舌したをまくとと

もに、為蔵ためぞうのねばり強たけさに関心かんしんをして入門にゅうもんを許ゆる

し、「芳翠ほうすい」の名前なまえをあたまました。

「これからだ。日本一の絵かきになる道は、まだまだ遠いぞ。」

入門にゅうもんを許ゆるされた芳翠ほうすいは、いっそう努力にくりきすることを決意けつぎし、常に、自分に言い聞かせながら、絵えの修行しゆぎようを続けるのでした。

洋画家山本芳翠ほうすいとしての出発しゅつぱつは、明治五年（一八七二）、彼が二十二才のときでした。

内容項目 一―(二)

出典 岐阜県教育委員会 郷土の道徳「灯を持つ乙女」

(昭和六十一年七月)

